

平成 23 年 1 月 14 日

私立大学図書館協会
国際図書館協力委員会
委員長 白井 文子 様

千葉県柏市光ヶ丘 2-1-1
麗澤大学図書館
堀江 元信

2010 年度海外認定研修報告

平成 22 年 8 月 31 日（火）に実施しました企画を 2010 年度海外認定研修として申請しましたところ、採択いただきましたので、別紙のとおり報告いたします。

私立大学図書館協会海外認定研修報告書

1. 調査・研修のテーマ

「韓国の中規模大学図書館の事情を調査する」

私は私立大学図書館協会の2008年度海外短期集合研修に参加させていただき、韓国ソウル市内の大学図書館や国公立図書館を見学した。その中で訪問した大学図書館は延世大学図書館、梨花女子大学図書館、国立ソウル大学図書館であったが、それらは韓国内でもトップクラスのレベルと規模を有する大学であり、学術情報のデジタル化を始めとした最先端の学習支援施設の設置と学習・研究活動を展開するものだった。しかし、本学図書館のような小規模大学図書館からみれば、その大学としての資金力や大手企業からの支援環境、また就学する学生達のレベルは余りにも大きな差異があるように思われた。

そんな中、その集合研修終了後に芽生えていたのが、もう少し中規模の大学図書館の実情を知りたいという思いであった。今回私的に再び韓国ソウル市を訪問する計画を立て、2つの大学図書館を選定し、その現状を見てみることにした。

2. 訪問先

漢城大学校学術情報館（図書館） ソウル特別市城北区三仙洞2街 - 389

URL <http://www.hansung.ac.kr/>

世宗大学校学術情報院（図書館） ソウル特別市廣津区君子洞98

URL <http://www.sejong.ac.kr/>

3. 訪問日程

日 時：平成22年 8月31日（火）

渡航日程 3泊4日のうち2日分は渡航移動のみで、実質的なソウル市滞在は2日間であり、その1日を下記の予定で訪問実施した。

10:30～12:00 漢城大学校学術情報館、 14:30～15:30 世宗大学校学術情報院

4. 事前準備 訪問のために事前に行ったこと

『韓国学校総覧』（東京教育公論 1995.1刊）や関係するウェブサイトを参考にして、ソウル市内に設置された在学生数3,000名前後の規模の大学校（日本の短期大学に相当する専門大学校は除く）を調査し、上記2校を拾い上げた。しかし、『韓国学校総覧』は15年前に発行された資料であり、その後の経済成長や教育行政の改革等によって現時点ではかなり規模が拡大しているであろうことが予想された。

2校を訪問先として決定した後に、事前に日本語と英語での訪問依頼書（あくまで私的な企画として）を作成し送付した。その結果、漢城大学校からは訪問歓迎の丁寧なEメールを受信することができた（世宗大学校からは回答無）。両大学校については、事前にそれらのホームページ等からできるだけ諸情報を収集し、大学の概観を確認した。

5 . 訪問報告

(1) 漢城大学校学術情報館

漢城大学校は、ソウル市城北区にある中規模の総合大学である。1945年に芸術系の女学校を出発点とし、1972年に女子大学として設立され、現在は共学の5学部で学生数7,000名の大学となっていた。そして、そのキャンパスの中心に位置しているのが、学術情報院と称している図書館施設であった。

事前にEメールで連絡をいただき若手の図書館職員 Yeom, Junghoon (ヨム, ジュンホン) 氏に現地キャンパスで対面し、施設見学およびインタビューをさせていただいた(ヨム氏の上司である事務課長にも挨拶した)。

学術情報館は6階建てで、資料が分野別に配架されていた。収容能力は約70万冊、すでに約50万冊が配架されていると言われた。メイン出入口となる2階フロアには情報検索用パソコンフロアが並んでいた。最上階である6階がAV資料の視聴フロアになっていた。旧式のカセットプレーヤーも設置されていたが、ほとんど使用されていないという。また、1階フロアの一区画には韓国農機具類の特別展示室や大学関係資料の展示室があった。また、学習室といわれる施設が3室あり、2室は23:00まで、1室は24時間使用できるものであった。また、それらは他の大手の大学校同様にパソコンで席予約をして利用するものであった。



《 漢城大学校学術情報館 》



《 館内の雑誌架・閲覧フロア 》

館外貸出冊数は1日に約800冊。資料の管理は磁気テープ挿入からICチップ貼付に変更したが、ICチップ切除による盗難が多く、磁気テープ挿入を加えて再開したということである。経費の関係で学生証のIC化は行われておらず、磁気テープ方式であった。通常授業中ということもあってか、館内はそんなに混んではいなかった。非常に穏やかな落ち着いた空間であった。学術情報関係の施設と銘打っているが、情報システムの施設や連動する設備が特別にある訳ではなかった。

漢城大学校でも学生達の活字離れは進んでいるという。学術情報への取り組みを低下させないように、電子ブックや電子ジャーナルの導入・普及に取り組んである。大学でのカリキュラム等と連動する学習支援活動は特に行っておらず、利用者に対する伝統的なレファレンス業務が主流となっている。学外の一般市民にも年間30,000wにて利用案内をしている。また、昨今の就職支援活動として、図書館ホームページに各種資格や語学のe-ラーニングソフトをリンクさせて提供している。24時間開放の学習室は30~50%の稼働率であるという。

また、いわゆる図書館業務のアウトソーシング(外部委託)については、そのような導入兆候はな

いようである。一部には書誌データ(マーク)の外注を行っている大学校もあるが、日本のように利用者サービス等具体的な図書館運営を外部業者に委託している例はないという。韓国においては図書館司書資格が専門職として位置づけられていると共に、外部の関係業者による図書館業務へのソリューション・インフラが出来上がっていないものと思われた。

図書館関係施設を学術情報館と命名しているが、内容的には標準的な図書館施設であった。伝統的な資料の収集保存と分類・提供を行うだけで



《 席を事前予約して使用する学習室 》

はなく、それらをデータ管理し、加えてAV資料の提供、電子ジャーナル・データベース類の提供、そして学習室の設置という多様な複合施設として構成しているということで、学術情報館という意味付けをしているのかもしれない。

韓国では厳しい就職活動において、学生達がいわゆる SPEC 向上に奔走するということがいわれるが、漢城大学校キャンパスや図書館施設内の学生達にはそこまでの緊張感は見られなかった。一様に大学生活を楽しんでいる雰囲気であった。



《 丁寧に対応していただいた Yeom, Junghoon 氏 》

(2) 世宗大学校学術情報院

世宗大学校は、ソウル市西部にある中規模といえども広大な敷地を有する総合大学である。1940年に教育協会が設立され、1948年に女学校、1954年に女子短期大学、1961年に4年制の大学校となった。現在は多くの校舎が立ち並ぶ共学の総合大学となっている。こちらでも、地上10階、地下2階建ての学術情報院と称する図書館施設がキャンパスの中心に位置していた。15年前の『韓国学校総覧』では学生数3,600名余と記載されていたが、現在は優に10,000名は超えている規模であった。

世宗大学校は漢城大学校のように事前の appointments を受けることはできなかった。しかし、受付および上階層の一角に設置された事務室にて来訪の趣旨を説明して、館内見学の許可を得ることができた。各階層に分野別に仕分けられて資料が配架されていた。それぞれに案内カウンターが設置されていたが、貸出返却作業を行う1階のメインカウンターを含めて全て学生アルバイトによって運営されていた。図書館の正規職員は



《 正門を入ると広大なキャンパスが広がる 》



《 学術情報院の正面 》

人文、社会、理学、芸術等多様な分野を有する総合大学であるが、こちらでも高度な専門分野に関する教育や厳しい就職状況への対応というような印象はなく、学生達は非常に明るく、青春を謳歌している雰囲気であった。

(3) 総括

両校共に学術情報施設と称しているが、基本的には伝統的な図書館施設であった。資料の開架を基本にして、AV資料視聴コーナーや情報検索コーナーを設置することによって複合的な学術情報環境であると位置付けているようであった。決して高度な学術情報環境であるとはいえなかった。やはり、大手大学校のように企業からの大規模な寄附を受けているような形跡もなく、資金力があるようでもなかった。特殊なことといえば、共に資料閲覧フロアとは別に地下層等に学習室を設置して、夜遅くまで使用させていることであり、一部には24時間体制にもなっていた。各自のIDカードで席を予約し使用する形式になっているということであった。これは、以前の集合研修にて訪問した公共図書館でもそうであったが、韓国では自宅ではなく公共の施設で学習するという習慣が強いからかもしれない。

図書館業務の外部委託は、通常業務としては全く導入されていなかった。また、情報インフラが日本以上に整備されているといわれる韓国ではあるが、図書館施設の中ではそのような機能が突出して構成されている雰囲気ではなかった(学生達が所持・使用する携帯電話はスマートフォンが多かった)。電子ジャーナルや各種データベース群についても、あくまで付随的な設備という程度のものであった。大学における教学体制と図書館施設が連動して企画されたものも全くなく、各種資格取得のための学習ソフトを予算の許容範囲内で設置して利用させているということもあったが、それほどの積極さも見受けられなかった。

最後に、それは日本でも同様ではあるが、図書館施設・業務といえども、その基本には大学教育環境そのものがあり、また国の高等教育行政によって大きく左右されるものといえる。韓国では日本以上に短期間で教育施策が変化する中にあるといわれる。近年韓国では多くの教育機関が多様な専門分

小さな事務室に数名が勤務しているだけであった。どれだけの学習・研究支援業務が展開しているのか明確なものは見えなかった。

1階の奥にはパソコン類が設置されており、情報検索性フロアになっていた。また、地階は学習支援施設として、パソコンで席を予約して使用する自学自習施設となっており、多くの学生達が入り出りしていた。キャンパス内には古典的な建物も残されていたが、かつては博物館としてあった施設が倉庫のようになっていたのは非常に残念であった。



《 館内の閲覧フロア 》

野を設置することによって総合大学として拡充し大学校としての認可を受けていったが、それらが特色のない教育環境となって、学生達の就学意欲を刺激するものにはならなくなっているともいわれる。その一方で、個性的な単科大学の設置を促進させる動きもあるようである。韓国では日本以上に少子化と高い大学進学率の中にある。経済成長と多様な社会変化の中であって、中規模レベルの大学が高等教育機関としてどのような試行錯誤にあるのか、短時間ではまだまだ見えない世界があるように思えた。図書館という現場の状況確認だけでなく、韓国の教育行政の動向や民族性、風土、歴史等をふまえながら、今後も見ていきたいと思う。

6 . 海外認定研修について

私立大学図書館職員の主体的な研修の活性化を目的として、海外認定研修という制度が設置されたことを知り、私的な発案で日本国外の公的機関に踏む込むことに若干の不安もあったが、企画立案し、折衝し、実施を試みた。幸いにも予定した機関には快く対応してもらうことができ、感謝の念に堪えない思いである。また、この愚企画を当研修として申請したところ、採択をいただくことができた。

各大学では図書館業務の外部委託が一段と促進されると共に、その担うべき業務内容も大きく転換していかなくてはならないといわれる。また、それは図書館職員である前に、大学職員としてその事務的運営から教育全般の質的保証にも関与しなければならないものともなっている。図書館職員が一部の特化した機関としてその業務を完結させることなく、大学のFD・SD活動と直接関わりながら展開していくという技量を持ち得ていく必要があると思う。その意味で、より主体的に情報収集や諸研修に取り組み、かつ情報発信していくために、多くの方々がこの海外認定研修に企画立案し申請されて、総合力をつけていく一助としていかれることを望むばかりである。

以 上